

「特集」みたき総合病院 緩和ケアの取り組み

在宅・外来・入院の多方面から 患者をサポート！

「緩和ケア」とは、一般的に「がんの進行によって生じる身体の痛み、心の痛みなどを和らげ、その人らしく生活できるように、総合的に支援すること」として知られています。

みたき総合病院では四日市市内で唯一の緩和ケア病棟を開設しており、外来、訪問診療などを含め、包括的に緩和ケアに取り組んでいます。在宅、病棟それぞれの現場の声を一宮恵院長が聞きました。



患者本人の希望に応じて 自宅での在宅医療へ移行

一宮院長 緩和ケアは、がんや診断された時から基本的に始めるべきとなっています。当院での緩和ケアがどのように提供されているか、緩和ケア病棟の渡邊尚美看護部長からお話しくさいますか。
渡邊師長 緩和ケアには、どうしても終末期というイメージがありますが、今院長が述べましたように、がんや診断されたときから始まります。当院の患者さん、地

域の急性期病院やがん診療連携拠点病院やかかりつけ医からの紹介、いずれの場合も、まずは地域連携室を通じて面談させていただいたのち、緩和ケア病棟に入院の運びとなります。その際には、がんや聞かされて、ご本人もご家族も非常に苦しみを持たれていると思いますので、気楽に相談できる場所でもありません、とお話しさせていただきます。



緩和ケア病棟看護部長
緩和ケア認定看護師
渡邊 尚美さん

を緩和することが目的の入院です。から、退院の希望があればご自宅に帰ることもできますよ、とお伝えすると皆さん驚かれます。



在宅医療部看護部長
皮膚・排泄ケア認定看護師
森 美穂子さん

症状がコントロールされて、QOL（クオリティ・オブ・ライフ／生活の質）が上がってきた段階で、患者さんのご意向、ご家族の介護状況や介護力を確認した上で退院していただき、在宅医療部による訪問診療への移行となります。

一宮院長 患者さんの一番辛い時期だけ入院して、疼痛などをコントロールし、QOLを高めることが、今の緩和ケアの大きな役割だと思っています。そのあたりについて現状はいかがですか？
渡邊師長 いろんな症状を抱えた患者さんたちが入院されてきます。医師も看護師も対話を大事にしながら、病気の進行で苦しむ患者さんに対して、その人らしく穏やかに過ごしていただけるよう、症状緩和に努めています。

あらゆる面に知識を持つ総合的なドクターが訪問診療を担い、全人的な治療を行っていることが挙げられます。
森師長 経験豊富な先生が訪問して、患者さんを支えるだけでなく、ご家族への対応も素晴らしく、当院の在宅医療はとて品質が高いと感じています。

入院、在宅に関わらず 切れ目のない緩和ケアを

一宮院長 各師長さんの努力もあって、病棟間のコミュニケーションがよく取れていると感心しています。緩和ケアについても入院外来、訪問での情報共有がうまくされているので、非常に良い環境で患者さんのフォローができています。

森師長 入院中に症状緩和はされていますので訪問診療を望まれる患者さん・ご家族には退院後の病状を見据え、さらに必要な医療管理を緩和スタッフ・訪問診療・在宅ケア・薬剤師・栄養士と協働し、意向に沿った在宅療養調整を

行っています。在宅療養の状況病状悪化・不安）に応じて、再入院へ移行する際にも緩和病棟・一般病棟と連携し、調整がスムーズな

のがとても患者さん・ご家族の安心につながっています。
渡邊師長 一度退院してしまうと、もう入院できないんじゃない



みたき総合病院 病院長
一宮 恵さん

か、と皆さん心配されますが、また当院にご入院できるように調整いたします、とお伝えしますと、本当に安心されます。入院後に一時退院して、おうちでしばらく過ごして、また入院、という方も少なくありません。そこは在宅と病棟がうまく連携してやっています。
一宮院長 北勢地区は緩和ケア専門病棟のベッド数が少なく、患者の入院の運営は難しく、苦勞されていると思いますが、いかがでしょうか？
渡邊師長 病床がなかなか空かないときに、どの時期にある方たちをどう調整していくのか、確かに難しいです。平均在院日数が20〜30日を切るころが多いなか、当院では30日を少し超えています。

病床数が30床と多く、比較的スムーズな入院ですが、予定退院がわかりませんので、お待ちいただくこともあります。
ただ、当院は総合病院ですから一般病床などにもお願いしたりしてベッドを確保することも可能です。病棟としても、在宅を支えるためには、何かあったときに入院できる受け皿としての役割を果たせるよう、情報共有を大切にしています。
森師長 緩和ケア病棟において入院中に症状や不安が緩和されると「家に帰りたい」という思いをスタッフはうまくキャッチされ、家族との時間・空間を共有できるように、さらにうまく働きかけてくれます。そこで患者・家族の意向

を尊重した支援を訪問診療と連携し、訪問看護をはじめ、在宅医療チームで住み慣れた自宅で過ごせるよう、患者・家族を支援していきます。また、私たちが専門性の高い看護師として自宅に訪問することが可能です。
当院の強みの中で、在宅療養が可能で入院が可能な病棟であることから、患者・家族の安心につながり、その連携は病棟のベッドコントロールにもつながっていると思います。
一宮院長 何か課題はありますか？
渡邊師長 地域の方に向けた緩和ケアの周知として、市民講座などをもっと開かれるといいなと思っています。
一宮院長 確かに、各がんをテーマにした講座はありますが、緩和ケアは少ないですね。



【お問い合わせ】
緩和ケア病棟「なごみ」
四日市市生桑町菰池458-1
☎059-330-6000
(地域連携室「せせらぎ」)
<https://mitakihp.jp/nagomi/>

緩和ケア病棟「なごみ」

医療法人尚豊会みたき総合病院では、平成29(2017)年6月、がん患者の痛みや不安などを和らげる治療を専門に行う、緩和ケア病棟「なごみ」を開設しました。四日市市内では初の緩和ケア病棟で、病床数は30(うち特別室2床)。医師・看護師・薬剤師・管理栄養士・退院調整看護師・社会福祉士・理学療法士などが連携し、チームとして患者と家族を支えます。症状緩和を必要とする患者を対象としており、介護だけを目的とする入院はできませんが、家族の休養のレスパイト入院は可能です(二週間程度)。

- 病室は全室個室
- 各病室にはトイレ、洗面台、テレビ・冷蔵庫、ソファ・ベッドを完備
- 患者や家族がくつろげるコミュニティスペースなどを用意
- 季節の行事や音楽などの催し物も開催

入院までの流れ

- 1 主治医(かかりつけ医)と相談の上、地域連携室「せせらぎ」に面談予約をする
- 2 医師、看護師または看護師、地域連携室の担当者などが、患者や家族と面談
- 3 入院の適否についての入棟判定会議を実施
- 4 地域連携室の担当者より入院の可否を連絡



一宮院長 医師会にも話していきたいと思っています。心不全の緩和ケアも求められる時代であり、非がん患者さんの緩和ケアも見据えながら、当院としては患者さんやご家族に寄り添った緩和ケアをこれからも提供していきたいと思っていますので、お二人もご協力をよろしく願います。

森師長 地域医療の中で勉強会・症例検討会の機会を増やし、患者さん・ご家族が今後さらに質の高い在宅医療が受けられるように地域全体でベストプラクティスを考えることが必要と思っています。

一宮院長 確かに、各がんをテーマにした講座はありますが、緩和ケアは少ないですね。